

寺川先生を送る

吉 野 政 治

現在の大学教師には三つのことが求められている。学者としての業績を上げること、組織人として学内の役職を果たすこと、そして、知識人として社会に貢献することである。寺川先生はこのすべてにおいて目覚ましい働きをされてきた。大学の組織が複雑化し、求められる教育の質も多様化してくると、さまざまな仕事に忙殺される。現在においても既にそうである。今後は一層それに拍車がかかるであろう。寺川先生のような方はこれから出てこないにちがいない。既にその一つをも十分に果たせない我々にとっては先生は仰ぎ見る超人のような存在である。

しかし、先生は何よりも学問の世界で後世に残るような仕事をすることが重要だと常々言われてきた。先生も本心は行政の仕事には価値をあまり置かれていないようである。先生の専門分野は上代日本文学であり、特に『日本霊異記』、『古事記』、『

『萬葉集』を中心に研究されている。精力的に書き貯められた論文のうち『日本霊異記』に関するものと『古事記』に関するものは既にそれぞれ一冊の本が上梓されている。遠からず『萬葉集』に関するものも一書が公刊され、その分野を研究する者にとつての重要な文献となるであろう。

学者は総じて政治には疎いものである。そのようにあることはむしろ良いこととされていた。しかし、先生はこの方面にも見識を持たれている。それは持つて生まれた才能であるが、大学が政治に深く関わった時代に学生生活を送った者が等しく直面せざるをえなかった政治と学問、社会と大学、個人と組織といった問題についての反省から得られたものに裏打ちされているのではないかと思われる。その見識を買われて、先生は常に学内の組織の中心で活躍されていた。学部長、企画部長等々

さまざまな重要な役職を任せられ、在職中役職に着かれていなかった時期は、ほとんどなかったのではなからうか。学内ばかりではなく、いくつもの学会の理事や委員を兼ねられて、奈良県立万葉文化館に研究所が置かれるとその所長にも着任された。

これら内外の役職を先生は肩書きだけで済ますというのではなく、精力的に取り組まれてきた。これには先生の誠実な性格がよく現れている。先生は何よりも不誠実なことが嫌いであり、いい加減なこと不正であることが嫌いだである。意図されたものかあるいは本人も気付かずにそうなったものかは判然としないうものもあるが、一見、全体の利益のため、他人の便宜のためになされたように見える行動や発言も、己の損得を勘定していることがあるが、そうしたことに先生は敏感であり、そうした態度を採る者を嫌い、許されなかった。先生は無私の人である

ことを理想として見るように見える。先生の言動から、そうした生き方を私たちは感じ取り、そうありたいと密かに願っていた。

自身の研究のための時間を確保されるために、先生は相当の無理をされていたのではなからうか。常に先頭を切っておられた先生も、特別任用教授にならなければ杖をつかれるようになり、学生や若い先生達に追い抜かれながら、教室に向かわれるようになった。しかし、先生の学問への情熱は衰えることはない。これからも学界を刺激する論文を発表され続けられることであろう。私たちはそれを期待しつつも、晴耕雨読の日を送られ、雨の日には愛猫の黒猫とのんびりと過ごす一日を持たれることをも願っている。